

現代の先駆者, 山本七平の病跡

奥村克行^{1,2)}, 松岡尚則^{2,3)}

Key words

Japanology, Christianity, contemporary philosophy, modernism, ideology

はじめに

山本七平(1921-1991)は、多方面にわたる分野の著作や評論活動により、日本の読書界で広く知られた人物である。特に日本人論は有名であり「山本日本学」と呼ばれ、日本研究全般にわたり高く評価された。PHP 研究所は彼の業績を顕彰するため、山本七平賞を創設している。この賞はその年の優れた人文・社会科学系の著作に対して与えられる。

山本が主に活躍した期間は『日本人とユダヤ人』を発表した1970年から、他界する1991年までの約20年間である。山本の業績は多岐にわたる。日本研究では比較文化論による日本人論、天皇制研究、貞永式目等の法制史研究、経済思想史、江戸期の町人思想家の紹介等、多彩であるが、日本論以外にも下級将校として参加した太平洋戦争のフィリピン戦の記録、聖書学や古代イスラエル史に関する著作等もあり、生涯に共著や対談を含めると200冊以上の著書があった。論壇でも活躍し、当時のオピニオン雑誌と呼ばれる雑誌を中心に発表や論争を行った。また内閣のブレンとして研究グループの議長や臨時教育審議会の議員を務めた他、イスラエルや聖書を紹介するテレビ番組を制作する等、活

躍の幅は広い。

山本は、斬新で大胆な評論により従来の通念や常識を覆すことで、多くの人々に影響を与えた。読者に人気が高く、大手の出版社から出版された著作が多い。1970年にベストセラーになり社会現象にまでなった『日本人とユダヤ人』でデビューしたが、当初から注目を浴びる存在であった。その後も話題となる仕事を立て続けに発表した。論壇登場以前は無名の存在であった。山本の著書は一般の読者を対象としたものであったが、アカデミズムで取り上げられることも多かった。しかし専門の研究職であったことはない。自ら発掘し紹介した、江戸時代に当時の官学である朱子学から離れて、自由で独創的な思想を展開した町人学者達と同じように生涯在野であり、アカデミズムから自らを峻別した。その著作は膨大な量の読書と思索に裏打ちされていたが、独学である。評論家となってからも自己を一書店主と規定し、零細出版社の経営を続け、それを貫き誇りとした。

山本の仕事は多彩であったが、その多くが日本人と聖書の理解のためのものであった。自分の知りたいことを探求し、考えたいことだけを考え続けることが山本の求める生き方であった。

山本の生い立ちは複雑である。幸徳秋水の大

OKUMURA Katsuyuki, MATSUOKA Hisanori: Pathography of shichihei yamamoto, pioneer of postmodernism

1) 精神医学研究所附属東京武蔵野病院 精神科：〒173-0037 東京都板橋区小茂根 4-11-11

2) 東邦大学医療センター大森病院 東洋医学科：〒143-8591 東京都大田区大森西 6-11-1

3) 公益財団法人 研医会：〒104-0061 東京都中央区銀座 5-3-8

逆事件で処刑された、後の大正デモクラシーの系譜に連なる人物である大石誠之助を縁戚に持ち、内村鑑三の弟子でもあった熱烈な新教徒の両親の下に、3代目のキリスト教徒として生まれた。太平洋戦争の影響で大学を繰り上げ卒業した戦中派世代であり、陸軍に徴兵され砲兵将校としてフィリピンに送られた。部隊が全滅した中で唯一人、終戦まで生き残ったが、戦犯容疑を受け、帰国後もそれに悩まされた。そして戦後の二十余年の沈黙の中で独り、日本人について考え続け、言論界に登場後は独自の研究や評論の発表を続けた。

1. 山本七平の業績

山本は日本について、比較文化論、宗教や思想史、法制度、経済史、技術史等、多角的な視点から研究を行ったが、日本論以外にも戦争体験の記録の執筆や聖書関連書籍の出版等、様々な仕事をしている。以下に代表的なものを列挙する。

日本研究

日本人論は西洋化や近代化の過程で常に国民の関心事であり続けたが、山本はその代表的人物である²³⁾。特に有名なのは比較文化論からのアプローチによる、ユダヤ人や様々な文化圏の人々との比較である¹⁾。山本は宗教をはじめ絶対的な規範がないと見なされる傾向のあった日本人の思考や行動の原理を追求し、異なる原理原則を持つ人々の精神構造と対比することにより、日本人の特徴を明確にした。比較文化論による日本人論は山本以降、出版界で流行する手法となった²³⁾。

天皇研究

山本は、江戸時代の山崎闇斎や浅見綱斎が、当時の官学である朱子学を論理的に突き詰め、徳川幕府は朝廷からの政権の篡奪者であり、統治の正統性を持たないという結論に至ったことに注目した。そしてそれが幕末の勤皇思想や明

治期の教育勅語、戦前の現人神思想に至る原点となったことを示すことで、近代天皇制成立の思想的背景としての崎門学派の意義と役割を明らかにした⁴⁾。

日本の資本主義形成の背景

鈴木正三や石田梅岩の石門神学の思想から、日本の資本主義成立において西欧でのプロテスタンティズムに相当する労働倫理の思想が存在したことを示し、勤労や勤勉の哲学が資本主義形成に果たす役割について論考した^{5,6)}。また倫理や思想の他にも江戸期以前に科学・技術、教育、組織等、日本社会の広範にわたり近代化の基盤となる歴史的蓄積が存在したことを紹介し、日本の近代化の必然性と合理性を説明した。

法制史, 組織形成史, 社会史

天皇と上皇を討伐し、流刑にする等、ラディカルな改革を断行した承久の乱の成功の要因を分析し、日本の革新、革命における思想的側面を分析した。また武士により自然発生的に成立した貞永式目に注目し、明治憲法発布まで続いた律令制との二重法体制が、日本の歴史的特徴である朝廷と幕府の権力併存の基礎をなしたことを示し、その意義を説明した⁷⁾。

その他、宗教史、経済史、社会史等、様々な観点から、日本の共同体や組織形成の歴史について論考を行った⁸⁾。

日本の様々な思想と思想家の紹介

鎌倉仏教や明恵等の中世の宗教思想、キリスト教受容時に発生した不干斎ハビアン⁹⁾等の日本人キリスト教徒の思想的問題、江戸期の町人学者や経世思想家等、様々な思想家を発掘しその思想を紹介した。そして明治維新や第二次世界大戦等の社会的変革により変化したように見えても、日本人の態度や思考の根底にある精神構造は実際には変化しておらず、連続的な理解が可能であることを示した。現代日本人の祖形として懐徳堂の山片蟠桃等を取り上げ、江戸期の日

本人は明治の西洋近代の受容期以前に、経済思想、宗教観、科学・技術の知識、道徳観、世界観、宇宙観等について、現代人の持つ知識や考え方や共通する基盤を既に持っており、心性や感覚に大きな断絶がなかったことを示した¹⁰⁾。

空気の研究

勝ち目のない戦争を遂行し、無謀な大和出撃を行う等、日本人が時に見せる非合理的な行動の背後に「空気」の存在があることを示し、日常用いられる「空気」「常識」「当たり前」等の言葉の特徴と機能を研究した。そして日本人が、臨在感を感じる対象を絶対化し対象に精神を支配される仕組みを、空気概念を用いて分析した。空気の生成や消滅を「空気の原理」「水の原理」として法則化し、日本人だけでなく人間一般の精神力動として捉えた。また空気から自由になる方法として、個人主義や自由主義、複対立的対象把握等の方法論や、自己の原理原則の自覚等を提示した¹¹⁾。

戦争の記録

歴史を記録して残すと言う聖書文化圏の伝統への意識から、砲兵将校として出征したフィリピンの戦場や捕虜収容所での体験を記録し、出版した¹²⁻¹⁴⁾。

聖書の書誌学、文献学関連書籍の出版

出版社を創業し、聖書関連書籍の出版を生涯続けた^{15,16)}。『旧約聖書のひとびと』、『旧約時代の民衆の生活』、『ユダヤ戦記』等の、欧米では広く読まれていたが、日本のキリスト教徒には知られていなかったキリスト教の関連書籍を翻訳、出版した。また一般の読者に対して聖書やユダヤ教、キリスト教、イスラム教等の考え方を紹介し、中東の社会情勢等の時事問題の論評や解説を行った。

以上、代表的なものを挙げた。山本は優れた思想の紹介者であり、山本によって初めて一般

に知られるようになったことも多いが、今日では社会的に常識化し通念となってしまうため、そのことに気付かれぬことも多くある。他方で記述の誤りや文献の外的な考証や評価の甘さを指摘されることもあり、今日では批判されている論説もある¹⁷⁾。

2. 山本七平の生涯

生育歴

山本七平は1921（大正10）年12月18日に現在の東京都世田谷区三軒茶屋である東京府荏原郡駒澤村で生まれた¹⁸⁾。4人兄弟の第3子であり、男子は山本だけであった。両親は謹厳な新教のキリスト教徒で、内村鑑三の勉強会にも参加していた。「七平」の名は神の安息日である日曜日の生まれであったことから命名された。山本は、「私は生まれながらのクリスチャンなので、もの心ついたときすでに教会の中にいた」と自伝的な著書に記している¹⁹⁾。キリスト教は、学校、結婚、生業等、人生の多くの場面で山本に関係していた。

両親の故郷

山本の両親は現在の和歌山県熊野地方三輪崎の出身で親戚同士であり、生家は戦国時代以前に遡る旧家で、明治以降は捕鯨の網元等、様々な事業に携わっていた。幸徳秋水の大逆事件で処刑された大石誠之助は縁戚に当たる。山本の両親は大石を慕っており、後に郷里を離れたのは事件の影響があったようである。大石の実兄の玉置西久は1884（明治17）年に洗礼を受け、新宮教会を建設した人物であり、両親は玉置の影響でキリスト教徒になった。日本最古のクリスチャンを自称し、ロバに乗り笛を吹きながら農園に通う等、奇行があった。「三代目のクリスチャン」というのが山本の口癖であったが、初代はこの人物を指すようである。

故郷を離れた後も山本家の郷里との関係は続いた。山本の父の台湾電力への就職や住居は同

郷の父の叔父に当たる角源泉という人物の世話であった。角は後藤新平と関係があり、台湾総督府等に勤め、代議士にもなった成功者であったが、父とは熊野水軍の伝統を引き継ぐ組織である若衆宿が同じであり、関係が深かった。山本の生家も角源泉の敷地の中にあった¹⁸⁾。

幼少期

キリスト教徒であることで、いじめや仲間外れにされることがないように気を使う幼少期を送ったようである。読書好きな子供であった。当時は教会派と無教会派の間に対立感情はなく、教会の牧師が内村の集会に出たり、内村の門下生が教会に行ったりということが普通に行われており、山本も教会の日曜学校に通っていた。

青山師範附属小学校、次いで教会の縁でキリスト教系の青山学院中等部、青山学院高等商業学部に進学した。

戦争体験, 捕虜収容所, 戦犯容疑

山本は学徒出陣の1年前の世代で、1942(昭和17)年戦争の影響で繰り上げ卒業となり、徴兵され、軍の方針で幹部候補生となった。砲兵下級将校としてフィリピンへ出征したが、部隊は全滅し、唯一人生残り、終戦後は捕虜収容所に収容された。BC級戦犯の容疑者の収容所に収容されたようである¹⁹⁾。戦争体験は心の傷を残した。山本は自分の激しい感情を見せることのない人であったが、戦場で見捨てることになった戦友のことを思い出して慟哭する父親の姿を息子が目撃している¹⁸⁾。

帰国後

1946(昭和21)年末に帰国、1947(昭和22)年から1948(昭和23)年にかけて、両親の郷里の熊野地方に父親の協力で材木の会社を設立し、移り住んだ。仕事のためだけでなく自身の戦犯容疑やGHQへの協力要請から逃れるためもあった。1948(昭和23)年、妹の病死もあり東京に戻り、生来の読書好きから本と関わる仕事

を生業にしようと思い、出版界に身を投じ、出版社に勤めた後フリーとなった。1954(昭和29)年、やはり3代目のキリスト教徒であり、内村鑑三の孫弟子でもある女性と結婚、1960(昭和35)年に一人息子をもうけた。息子は後に神学校に進んでいる。1956(昭和31)年、自分の出版社を創業し、主に聖書学関係の書籍を出版した。火事で自宅や在庫が焼けたり、採算を度外視して本を出版することもあったりしたため、経済的な苦労も多かった¹⁸⁾。

『日本人とユダヤ人』で論壇に登場

1970(昭和45)年、49歳の時に仕事場になっていた帝国ホテルで2人のユダヤ人との出会いをきっかけに、イザヤ・ベンダサン著、山本七平編訳として出版された『日本人とユダヤ人』が、大ベストセラー、ロングセラーとなり、山本の人生の大きな転機となった。初めに外務省で売れ始め、口コミにより通産省、霞が関の官庁街へ、当時の外交、通商問題等の対外折衝での摩擦や国民との意識のずれに悩む官僚からブームが始まり、やはり同じような問題を抱えていた大手町や新橋のビジネスマンに広がり全国に波及した。初版25,000部であったため売り切れが続出し、手に入らない幻の本として注目を浴び、著者であるイザヤ・ベンダサンの正体が分からずメディアで正体探しが行われる等、社会現象にもなった。今日ではイザヤ・ベンダサンは山本七平が作った架空の人物であるとされている。『日本人とユダヤ人』は2人のユダヤ人と山本の対談の口述筆記を原本として山本が執筆したものであり、実質的な著者は山本であったことが、没後に残された談話テープや知人の証言等から判明している¹²⁰⁾。

評論家としての活動と晩年

『日本人とユダヤ人』の出版後、初めはイザヤ・ベンダサンの名で、次第に山本七平の名で著作活動を行うようになった。基本的に頼まれた仕事は断らず、呼ばれれば神道連盟や天理教等へ

も講演に行ったため、クリスチャングループからは批判されることもあった¹⁷⁾。1990（平成2）年に癌が見つかり手術を行ったが、1991（平成3）年に再発し、12月10日に他界した。享年69歳だった。家族の意向で遺骨はイスラエルで散骨された²⁰⁾。

3. 山本七平の仕事の意義

山本の言論界での特殊性を、当時の文化的状況や時代背景を踏まえつつ考察する。

時代背景

山本は、国際間の緊張が強く、世界各地で戦争が行われていた冷戦期に評論活動を行った。当時は、人々の思想的対立も激しく、学生運動や文化大革命等の社会運動や政治運動も活発であり、戦争や革命による教育や社会制度の転換により世代間の考え方に差異が大きい時代であった。日本では経済成長により人々が自信を持つようになっていた一方で、海外との文化や経済の摩擦や軋轢が生じていた。現在とは異なり出版や放送等のメディアの影響力が強く、書籍や雑誌が知識人や文化人の言論の場となり、意見の発信や世論形成に大きな役割を果たしていた。

イデオロギーの絶対化とモダニズム

時代状況を反映し、現代思想による近代主義批判が起こる以前には、特定のイデオロギーが政治、教育、メディア等と相互作用し、人々に圧迫的に働く傾向があった。イデオロギーによる特定の思考図式の絶対化は、柔軟で複眼的な対象把握と相対化を困難にし、排他主義を生じた。ある場合には理論に適合して理解できることのみを分かったつもりになったり、また別の場合には矛盾や都合の悪い事柄に対して無意識に目を逸らしたり、失認したりしているのに、そのことに対して自覚や謙虚さを持つことができない状態が容易に生じた。近代の日本では、明治維新や敗戦のような社会体制の転換後には、

明治的啓蒙主義や戦前悪玉論のように前時代を否定する思想が現れた。また国家間の対立の緊張の中で育った世代は、世の中を二元論的に捉える傾向を持っていた。社会科学全般に渡り特定の思想の絶対化する風潮が近代には強まったが、日本史学も皇国史観や進歩主義、唯物史観等の特定の理論に当てはまらない事象や研究をタブー視し、排除する動きが見られた。当時、強い影響力のあった近代主義の思想は、ヘーゲル哲学から派生したマルクス主義であったが、フランス現代思想が紹介される以前には、それを相対化し得る有力な言説が乏しかったため、賛成か反対かに関わらず強力な先入観となり、その影響を逃れることが困難であった。そのような時代に、イデオロギーによる先入観を離れて発言できた人は多くはなかったと思われる。

空気概念と現代思想との類似性

山本は、啓典宗教の考え方を日本人に適用し、原理原則を持たず、合理性や主体性のない矛盾した思考や行動を時に見せる日本人の原理原則を探求する一方、その背後にあるものの正体を解明しようとし、「空気」の概念に到達した。山本によると、近代の日本人はその時々にはある程度、整合性のある原理原則を持つが、時間とともに原理原則が変化して別のものとなり一貫性がないことを見出した。原理原則がどの様に形成され変化していくのかを研究し、「空気の原理」としてまとめた。また、空気によって作られる原理原則は強制力を持ち、それに反すると社会的制裁を伴う事もあるため、「日本教」と呼んだ。空気は支配力を持つが、それは対象を絶対化することで偏見や先入観が生じ、自覚できないままそれに拘束されてしまう状態である。そのような空気の支配から逃れる方法として、個人主義と自由主義の尊重、自己の原理原則への自覚、そして相互に異なる複数の思考図式から対象をとらえる M. バフチンのポリフォニー論²¹⁾に類似する、複対立の対象把握という対象相対化の方法を考えた。そして絶対的な対象として

の意味を持つ、天皇、マルクシズム、更には自身の信仰対象であるキリスト教をさえも、俯瞰的に眺め、相対化し、自由に思考しようとした。

山本の考え方は、原理原則を重視する点では構造主義的、更に整合性を重視する点で公理主義的であり、またメタな視点から原理原則の生成と変化の力動を考える点ではポスト構造主義的である。山本は、臨在感を持った対象を絶対化することにより空気が生じると考えたが、これは哲学の現前の考え方と類似している。そしてイデオロギーの絶対化とモダニズムを批判し、イデオロギーに精神的に支配される状態からの解放を目指している点はポストモダンの点である。それらの点から山本の思想は現代思想的と言える。日本でフランス現代思想が流行する以前の時期であり、それらの点で山本は時代の先駆者としての側面があった。

新たな日本理解

上記のような視点から山本は常識や先入観を離れ、従来認識されていなかったり誤解されたりしていた、従来と異なる日本の姿を発見した。思考図式を変更し、対象を説明する新たな論理を示すことにより、特定のイデオロギーでは断絶があるように見えた日本史が連続的に理解可能である場合があること、また逆に日本について理解しているように思い込んでいることでも実際には全く理解不可能である場合があることを示した。そのようにしてまた、特定のイデオロギーだけを用いて日本を説明することや、特定のイデオロギーでは理解できないことにより日本を特殊と考えると合理的な理解を放棄することにも、どちらにも意味がないことを示した。絶筆となった『日本人とは何か』では、従来とは全く異なる日本史像を構築し描き出している⁸⁾。

4. 山本七平の創造性の考察

キリスト教と生育環境の特殊性

山本は新教的な家庭の雰囲気の中で育ち、軍

隊では「酒も博打も女も知らない」と驚かれる程、世間知らずであった。無教会主義というやや原理主義的なキリスト教を信仰する家庭で育った点では特殊な環境であり、日本社会の中でマイノリティーであり、異邦人としての面を持っていた。後に山本は多数派に呑み込まれないために、相手との間に一線を画し、誰に対しても完全に心を許したことはない¹⁹⁾と述べている。そこから、山本の文化的な越境者としての側面は、半ば意識的なものであったことが分かる。

山本は、「三代目のキリスト教徒として、戦前・戦中と、もの心がついて以来、内心においても、また外面的にも、常に『現人神』を意識し、これと対決せざるを得なかったという単純な事実に基づく」と記しているが⁴⁾、幼少時からの非キリスト教徒の子供とは異なる特殊な方向への興味が、山本の研究への動機やユニークな人間性と業績を生んだと思われる。

大逆事件の影響

縁戚者の天皇への叛逆と暗殺未遂事件での処刑は、山本家に独特な影響を及ぼしたと考えられる。現在ではこの事件には社会主義者の撲滅を謀る司法当局による捏造があり、実際には大石は無罪であったと考えられている。大石の甥に大正モダニズムの中心となる文化学院を作った西村伊作がいる。権威への反骨心は紀州の血なのかもしれない²²⁾。

山本は穏やかな人柄であったが捏造や冤罪問題の論争では激しい怒りを見せた。冤罪、捏造、天皇等に対する関心、感情移入、熱狂的とも言える追究には、この事件が関係していると考えられる。山本は徴兵検査時に父親に教えられるまで、自分が事件に関係があることを知らなかったが、家庭に何らかのタブーがあることには気付いていたようである¹⁹⁾。事件の子供時代の山本のへの影響は、教育方針や家庭の雰囲気等の間接的な形で及んだと考えられる。幼少時の山本はキリスト教と緊密な環境下で、純粹培養的な雰囲気の中で育ったが、外界との間に壁を作

り人と距離を取った生育環境は、両親の防衛的な側面の反映である可能性がある。不敬事件によりキリスト教信仰と近代天皇制の間で同じように人生を翻弄された内村鑑三への傾倒を考えると、父親は心に複雑なものを抱えていた人だったのかもしれない¹⁷⁾。

軍隊と収容所体験

山本の経験した日本陸軍の不合理性と機能不全は、山本が日本研究を始める直接の契機であった。山本の様に兵士として戦争を体験した人々の中に、やはり日本について考えた司馬遼太郎や会田雄次等がいるが、現実や運命への不条理感はその世代に共通するものであった^{23,24)}。

冤罪問題

捏造による冤罪で親族を処刑され、自分自身はBC級戦犯容疑に怯えた山本にとって、冤罪問題は生涯の関心事であった。自ら求めたのか偶然かは不明だが、それら以外にも人生の様々な場面で冤罪問題に直面している。論壇では南京戦での百人切り報道で処刑された人物に関する捏造や冤罪について追及と論争を行い^{13,25)}、『洪思翊中將の処刑』等、戦犯問題についての著作もあった²⁶⁾。山本の著書にはイエス、皇帝暗殺事件でシベリアに送られたドストエフスキーや彼の著作である『カラマーゾフの兄弟』等、冤罪への言及が繰り返し現れる。BC級戦犯裁判では「山本」のような頻度の高い姓は人違いで有罪となることがあった。自身も冤罪への恐怖を体験した山本にとって集団ヒステリーのような状態が裁判に影響を与えることは脅威であり、無視することはできなかった。W. シェークスピアの戯曲、『ジュリアス・シーザー』に見られるように、興奮した群衆は名前などどうでもよくなる²⁷⁾。山本の思想は、裁判における事実と真実とは何か、法と倫理の関係、正義への懐疑等への問題追究から生み出された側面を持つ。

文献学の影響

山本は聖書の文献学である聖書学に強い関心を持ち、自身の出版社で関連書籍を出版した。文献学的方法への知識や理解、愛情は、仏典を考証した富永仲基に対する親近感にも現れている⁸⁾。聖書学は聖書を考証学的に扱うため、一般のキリスト教信者から反発を受けることがある学問である。文献学的な実証主義により、一つの文献を先入観を排除して丹念に読み込み、通説や固定観念に囚われない日本像を提示する手法は、山本の独自性を生んだ大本であるが、佐藤進一や網野善彦等、同時期の日本史学の潮流でもあり、共時性が見られる²⁸⁾。

ライフスタイルの確立

山本は自分の関心のある問題を探求するために、膨大な時間を思索と読書に費やした。天皇や現人神については幼少時から興味を持ち続け、古文書を渉猟し、戦後も20年以上に渡り独力で考え続ける等、自己の興味の追究に強い執着を示した⁵⁾。それが可能であったのは、山本が意識的に自分のライフスタイルを作り上げたためであった。自分のしたいことをすること、つまり読みたい本を読み、考えたいことを考えながら自分と家族の生活が成り立つことを山本は目指した。それに関しては小林秀雄が山本のモデルとなったようである。山本は小林秀雄をある時期、「著作を覚えこんでしまうほど」読み込み、自分の好きな事をだけをしながらも生活が破綻しない一流の生活者であると見なし、その生き方に憧れた²⁹⁾。出版の世界に入り自分の出した本を出版したが、粘り強い努力により評論家として成功し、経済的な余裕と自由な文筆活動が可能なる状況を得て、読書と思索に自分の時間を費やせるようになり、自らの夢を叶えた。

おわりに

山本七平の意義と創造性について考察した。現在では単一のイデオロギーを絶対化すること

なく、物事を語ることは以前よりは容易になったが、山本の時代はそれが困難な状況があった³⁰⁾。山本は時代の空気に影響されず、物事を客観的に眺めることができた、当時では稀有な存在であった。山本の独自性には山本の特殊な経歴が関わっていると考えられる。個人として主体性を強く保ち、自由に物事を眺めることで独創性を発揮し、空気から解放される手がかりを読者に提供した点で、山本は日本の言論史において特異な位置を占める存在であった。

文献

- 1) イザヤ・ベンダサン, 山本七平: 山本七平ライブラリー⑬日本人とユダヤ人, 文藝春秋, 東京, 1997.
- 2) 船曳建夫: 「日本人論」再考, 講談社, 東京, 2010.
- 3) 南 博: 日本人論の系譜, 講談社, 東京, 1980.
- 4) 山本七平: 現人神の創作者たち, 文藝春秋, 東京, 1983.
- 5) 山本七平: 日本資本主義の精神 - なぜ, 一生懸命働くのか, 光文社, 東京, 1979.
- 6) 山本七平: 勤勉の哲学 - 日本人を動かす原理, PHP 研究所, 東京, 1979.
- 7) 山本七平: 日本的革命の哲学 - 日本人を動かす原理, PHP 研究所, 東京, 1982.
- 8) 山本七平: 日本人とは何か - 神話の世界から近代まで, その行動原理を探る, PHP 研究, 東京, 1989.
- 9) イザヤ・ベンダサン, 山本七平訳編: 山本七平ライブラリー⑭日本教徒, 文藝春秋, 東京, 1997.
- 10) 山本七平: 江戸時代の先覚者たち - 近代への遺産・産業知識人の系譜, PHP 研究所, 東京, 1990.
- 11) 山本七平: 「空気」の研究, 文藝春秋, 東京, 1977.
- 12) 山本七平: ある異常体験者の偏見, 文藝春秋, 東京, 1974.
- 13) 山本七平: 私の中の日本軍, 文藝春秋, 東京, 1975.
- 14) 山本七平: 一下級将校の見た陸軍, 朝日新聞社, 東京, 1976.
- 15) 山本七平: 聖書の常識 - 日本人は知らなすぎる, 講談社, 東京, 1980.
- 16) 山本七平: 聖書の旅, 文藝春秋, 東京, 1980.
- 17) 会田雄次, 佐伯彰一: 山本七平と日本人 - 【対論】 - 神教文明のなかの日本文化をめぐる, 廣済堂, 東京, 1993.
- 18) 稲垣 武: 怒りを抑えし者 - 【評伝】山本七平, PHP 研究所, 東京, 1997.
- 19) 山本七平: 静かなる細き声, PHP 研究所, 東京, 1992.
- 20) 山本れい子, 山本良樹: 山本七平がんとかく戦えり, 増補改訂版, 山本書店, 東京, 1990.
- 21) 桑野 隆: パフチン - カーニヴァル・対話・笑い, 平凡社, 東京, 2011.
- 22) 会田雄次: 歴史小説の読み方 - 吉川英治から司馬遼太郎まで, PHP 研究所, 東京, 1986.
- 23) 会田雄次: アーロン収容所, 中央公論社, 東京, 1962.
- 24) 司馬遼太郎ほか: 八人との対話, 文藝春秋, 東京, 1993.
- 25) イザヤ・ベンダサン, 山本七平訳: 日本教について - あるユダヤ人への手紙 -, 文藝春秋, 東京, 1972.
- 26) 山本七平: 洪思翊中將の処刑, 文藝春秋, 東京, 1986.
- 27) ウィリアム・シェークスピア, 坪内逍遙訳: ジュリヤスシーザー, 早稲田大学出版部, 富山房, 東京, 1913.
- 28) 小路田泰直編集: 網野史学の越え方, ゆまに書房, 東京, 2003.
- 29) 山本七平: 小林秀雄の流儀, 新潮社, 東京, 1986.
- 30) 高澤秀次: 前後日本の論点 - 山本七平の見た日本, 筑摩書房, 東京, 2003.